

CAROWAA

CAROWAA — ちゃろわ

アチョリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィス
の現地スタッフが名づけてくれました。ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。

地方政府行政官の能力向上に著実に貢献:ACAP終了時評価調査

アチョリ地域開発計画策定能力強化プロジェクト(ACAP)の終了時評価調査が5月20日から6月11日に渡り実施されました。評価調査では、小向絵里国際協力専門員を団長に、評価コンサルタントとして2年前の中間評価にも参加した片平エンジニアリングの一宮尚美氏、これに地方自治省の地方自治担当エマニエル氏をウガンダ側代表に加え、過去3年半に渡って実施されてきたプロジェクトの実績、成果の詳細について情報を収集、分析、取りまとめを行いました。

評価調査の結果、プロジェクトが編集した開発事業計画策定を補助する各種ツールを通じ、また、井戸建設などのパイロットプロジェクト実施を通じて、主な協力対象となったアチョリ地域4県(Amuru, Nwoya, Kitgum, Pader)の主任行政官、計画局長、コミュニティ開発局長他の地方政府職員的能力向上に貢献したことが確認されました。また、本件プロジェクトで導入された各種ツールは、国家計画庁が昨年、導入した開発計画策定ガイドラインを補完できる簡易で、公平、かつ使い易いものとして、これら4県の各郡、各パリッシュレベルでの計画作りに活用されていることが明らかにされました。



計画策定ツールの演習

ところで、本プロジェクトでは、同じく4県を対象に、3年間で合計98本の給水施設(井戸)が建設されましたが、対象村の選定、入札図書の作成、入札の実施、契約の締結、施工管理、最終検査と支払などを地方政府職員が実際に担当しました。計画作成は、とかく机の上での仕事に成り勝ちですが、コミュニティに数多くあるニーズに客観的な優先順位を付け、それが事業となって実現する過程を実際に体験することが出来たことで関係職員の視野が広がり、能力が向上したものと確信されます。終了時評価調査に参加したエマニエル氏も計画策定と事業実施が一体的に実施されたことで、プロジェクトの成果が更に着実なものとなった点を強調していました。

本プロジェクトは、JICAの技術協力として、ウガンダ政府の行政機構を活かし、その機能を更に向上させる目的で実施されましたが、他ドナーによる協力がとくく施設建設、資機材の供与などハード面に偏る中で、地方政府職員的能力向上というソフト面からチャ



水管理委員会への聴き取り取り

レンジし、見事に所期の目的を達成できたことは、これに携わって来た多くの専門家の弛まぬ努力の賜物であると深く認識しています。

プロジェクト終了を半年後に控え、現在、主要4県における生計向上分野のパイロットプロジェクト実施、計画策定補助ツールの残り3県(Gulu, Agago, Lamwo)への導入、定着のための活動が継続されていますが、これらプロジェクト成果がアチョリ地域住民へのより質の高い行政サービスに結びついていくことを見守って行きたいと思っています。

ウガンダ北部平和・復興・開発計画(PRDP)第三フェーズに突入

JICAの北部復興支援プログラム(REAP)がその拠りどころとするウガンダ政府の特別プログラム北部平和・復興・開発計画(PRDP)が2015年7月から第三フェーズに突入します。PRDP第三フェーズでは、住民の収入向上を全ての活動の究極の主題に据え、そのもとに、平和の定着、経済の発展、そして脆弱性からの脱却の3課題を戦略目標としています。また、PRDPを同じく本年7月1日から始まる第二次国家開発計画を補完するものとしつつも、これに付加的な扱いとすることを明らかにしています。この結果、PRDP3は、国家開発計画と同様に2020年までの5年間の計画となりました。

第二フェーズの途中で、経理職員による資金の不正使用に端を発し、ドナーの首相府(OPM)に対する不信が興りましたが、今回、DFIDが第三フェーズの設計に資金提供したことに見られる通り、ウガンダ政府の対応を評価し、第三フェーズを信認した形となりました。世銀は、第三フェーズの5年間で総額130百万ドル相当の第三次北部ウガンダ社会活動基金(NUSAF3)を供与することになりました。

ウガンダ政府、各ドナー共に、2000年中盤から平和と安定を取り戻しつつある北部ウガンダが、不就労若者人口の急増、土地を巡る争議の増加、心身の両面にわたり、未だ紛争の傷跡が癒えていない紛争弱者の存在などによって、再び、内戦の芽が膨らむことを抑制しなければならぬと考えています。

20年に亘る紛争を経て、一見、平和を取り戻したかに見える北部ウガンダですが、これまでの復興への相当の努力が無に帰すことがないよう平和と安定、開発への基盤を更に強化しようとするウガンダ政府及び国際社会と歩調を合わせながら、JICAの北部復興支援を考えて行く必要があります。

備考:本記事は、PRDP3最終ドラフトに基づいていますが、閣議、国会承認の過程で内容に若干の変更が生じる可能性がありますのでご了解下さい。

75本の井戸すべてが引き渡されました！

「アチョリ地域国内避難民定住促進のための地方給水計画(AWAT)」

5月30日、無償資金協力「アチョリ地域国内避難民の定住促進のための地方給水計画(AWAT)」で建設された井戸すべてが住民に引き渡されました。本プロジェクトは、約20年に及ぶ避難民キャンプ生活から解放され、村に戻った住民に対し、安全な水を提供することを目指すもので、アチョリ地域全7県で合計75本の井戸、及び6カ所のRural Growth Center(地域の経済活動の中心の街)に管路給水施設が建設されています。国の統計上では、アチョリ地域住民の安全な水へのアクセス割合は80%以上となっており、ウガンダ国が設定する2015年の到達目標の77%を上回っていますが、水源の多くは旧国内避難民キャンプの周辺に集中しており、この数字は村に帰還した住民の生活実態とは大きくかけ離れています。



無償資金協力

「アチョリ地域国内避難民定住促進のための地方給水計画(Acholi Water)」

本プロジェクトは、20年の国内避難民キャンプ生活を終え祖父伝来の村に戻ったアチョリ地域住民に対し、生活に必要な安全水をコミュニティ内で提供することを目指すもの。アチョリ7県で合計75本の井戸、及び6カ所管路給水施設が建設される。無償資金供与総額は、9億7千3百万円。

数キロ先の井戸まで長時間かけて水汲みに行っていた村、湿地の水を使うしかなかった村、野生動物もやってくる水場を使うしかなかった村、そんな75村、合計22,500人の水環境が大きく改善されました。単にきれいな飲み水が身近で手に入るだけではなく、水に起因する赤痢や眼病など、保健、衛生状況の改善も本件のような給水プロジェクトの大きなメリットです。Kitgum県のLabworomor村で実施された井戸の所有証明授与の記念撮影では、水管理委員会のメンバーから「受け取りました、ありがとう。大事に使います」というメッセージを、この写真とともに是非日本の皆様に届けて欲しいと依頼されました(右上写真)。またPader県のTee Tworo村では、感謝のしるしとしてニワトリ1羽と作りたてのシアオイル*をいただきました。6ヶ所の管路給水設備も、すでに4ヶ所で引き渡しを終了しており、7月末にはすべての施設が完成予定。少しずつですが、確実にアチョリの人々の生活は改善されています。*シアの実から抽出される油。アチョリでは主に料理に使われますが、これが固まったものが化粧品などに使用されているシアバター。

西ナイル地域での基礎情報調査

ACAPの終了時調査で北部ウガンダを訪問中の小向国際協力専門員、社会基盤・復興支援部の宮川さんに同行して、西ナイル地域のAdjumani県、Koboko県、Arua県事務所を訪問しました。西ナイル地域は、JICA北部復興支援プログラムの対象地域と指定されていますが、これまでは、UHHCRとMOUで合意されたコメ増産プロジェクト(PRiDe)によるコンゴ民主共和国(DRC)、南スーダン(SS)難民及び受入コミュニティへの稲作支援の他には、取り立てた活動は行われていません。こんな中、ウガンダ政府から要請があったACAP第二フェーズでの地方政府行政担当職員的能力強化への支援可能性を探る目的で今回の基礎情報調査が行われました。

今回訪問した3県では、12万人にも及ぶDRC及びSSからの難民が受け入れられています。西ナイル地域と同じ民族、言語、生活習慣を持つ難民がそのまま現地のコミュニティに溶け込んでいるケースも少なくありません。彼らの実数を把握することが困難な一方、難民とウガンダ人の共生が地域交易の活発化を後押ししている現状もあります。現在のところ、これら難民とウガンダ国民との間に目立った係争は起こっていませんが、平和に誘発された近年の人口増加が顕著にみられており、今後、土地を巡る争いに発展する可能性も指摘されています。

ACAPの第二フェーズがどんな形になるか、今後の検討を待つところですが、治安上の課題を抱えるこれら周辺国の安定に果たす西ナイル地域の役割は、非常に重要と看做されていますので、JICAとしてもそれらの要素を考慮しながら、地域の安定に貢献できる事業を展開していきたいと考えています。



Koboko県では大歓迎を受けた



アジュマニとモヨを繋ぐLaropiフェリー



整然としたAruaの街並み



西ナイルとアチョリを結ぶPakwach橋

グル道路整備計画(無償資金協力)調査実施 より効果的な協力を実施するために！



国家統計によると、ウガンダの他の地域に比べてまだまだ貧困率が高い北部ウガンダですが、中心都市であるグルには、人も物も集中し、南スーダンへの物流の増加も相まって活況です。グル市内のメイン道路の交通量は2012年から2015年で約2倍になったとの調査結果もあります。そのような状況ではありますが、この市内の道路の状態は非常に悪く、路肩のアスファルトは大きくえぐれ、車はもとより、バイクも歩行者も安全に通行できない状態です。雨期には排水溝から水があふれ、通行のみでなく衛生上も大きな問題となっています。グル市から4方向に延びる国道の整備も進む中、急務となっているグル市内道路整備計画(無償資金協力)の概略設計のための調査が3月下旬から5月初旬にかけて行われました。



短時間に強い雨が降ると側溝が溢れ冠水するこの区間は、工事の大きなポイントの一つ。



碎石場の調査では、環境への影響のみでなく、碎石を作って生計を立てている人への配慮も必須。



街中での測量

調査では、支援が要請された約8.5kmについて、既存の道路の状況調査とともに、交通量、地形、降水量なども情報収集され、道幅や歩道、排水溝などの設計について、グル市やグル県とも何度も協議が持たれました。支援対象道路は、国道や他の機関が支援を行う道路と繋がるため、それらについてもつなぎ目になる地点で不具合が生じないよう、入念に検討されました。

「道路が良くなると交通事故が減る、というのは、途上国ではあてはまらない。事故が減るように道路を改良しなくてはいけない」30年以上このような業務に関わっている調査団のメンバーの方は、調査期間の最終日も街に調査に出かけていました。ウガンダでは、交通事故が起こる地点のことをブラックスポットと言います。調査で交通警察に聞き取りを行ったところ、ほとんどすべての交差点がブラックスポットで、大小さまざまな交通事故が頻繁に起こっていることがわかりました。道路の穴ぼこが無くなると必然スピードも上がり、事故にもつながります。それを防止するために、車、バイク、歩行者の動きを予測し、自然に安全な動きを促すような設計にする必要があるとのこと。最近日本の地方都市でも信号のない交差点、「ラウンドアバウト」が導入され始めていますが、ここではそれが主流です。歩行者がより安全に道を渡れるように、横断歩道を少し盛り上げるなどの工夫もされる予定です。設計の検討会で、このような説明を受けたグル市の助役はこの配慮に大変感銘を受けた様子でした。



歩道が整備されていないので、歩行者は障害物を避けながら、車道を歩く。



調査団は、どこでも子供たちの注目の的



関係者への調査報告会。調査をもとに作られた概要設計の内容を検討。

工事の配慮は、このような直接的なもののみにとどまりません。舗装工事に多量に必要な石材の採石場として予定されているサイトでは、手で碎石しそれを売って生計を立てている人たちがいます。その人たちに対して、どのような配慮が必要ということも検討課題として取り上げられています。

グル市の発展には、市内道路の整備は不可欠です。一連の調査は8月に予定されている雨期の状況調査で完了、工事着工は2016年9月の予定。ウガンダ政府とグル市は電柱の移動、水道配管の確認・移設、関連し合う他のプロジェクトとの調整など、プロジェクトの工事がスムーズに開始できるよう準備を始めます。

Health Centerの診療環境も改善されました！

「ウガンダ北部アチョリ地域国内避難民帰還・定住促進のためのコミュニティ再生計画」プロジェクトについては、これまでのニュースレターで主に学校について取り上げてきましたが、本プロジェクトにより3県3か所のHealth Centerの状況も大きく改善されています。Pader県Bolo Health Centerでは、外来棟が無かったために、スタッフ宿舎の一部を診療室として使い、木陰が待合室でした(写真左)。現在は、建設された外来棟の待合室(写真中)でと言いたいところですが、入りきれず相変わらず外で待つ人も(写真右)。けれども、屋根があるので、突然の雨も心配する必要はありません。



グル中央マーケットいよいよオープン？



4月28日、長い間、ボマグランドに仮店舗を構えていたグル中央マーケットが、グル市内の一等地に遂に完成、ムセベニ大統領の出席の下、Commissioning（開所式）が行われました。当日は、事前に時間の予告も無く、夕方の僅かの時間を狙ってテープカットが行われた模様で、朝から2時間おきにカメラをもって偵察に出掛けていたフィールドオフィスの職員も隙を突かれてしまいました。こんな異例のオープニングが暗示したかのように、6月末現在、小売業者の店舗割も終わっておらず、グル随一の巨大構造物である中央マーケットは、雨露にさらされたまま放置？されています。何時になったら人々が行き交う賑やかなマーケットになるのか不明ですが、敷地の片隅に設置されたムセベニ大統領の小さなお人形がポツンと寂しく、その日を心待ちにしているかのようです。



安全情報:グルでマラリア注意報！

4月24日の新聞で、子供の重篤な(Fatal)マラリアの罹患率が、2009年の42%から2015年は19%に大きく改善されたと報道されました。中でもアチョリが含まれるMid-Northは2009年の63%から2015年には20%と1/3になったとのこと。2009年のグルオフィス開設当初は、プロジェクトの日本人関係者にもマラリアに罹患する人がいたとのことですが、最近は聞かなくなった、という話をしていた6月8日、5月以降グルでマラリアの患者が急増しているとの情報。時期を同じくして、マラリアの調査に来られていた大阪大学を中心としたチームの先生方から「今回は患者がとて多く、大人でも重篤になる人もいる」というお話が。理由はいろいろ考えられるようですが、まずは自身の防御が第一、今一度防蚊対策の確認を行っています。

マンゴーの季節！



グルオフィスの庭で、こんな立派なマンゴーが採れました。日本ならいくら？

～人の動き～

グルの日本人人口が減少軌道に

前回のニュースレターでお伝えした通り、4月末に30人に迫ったグルの日本人人口が、急転、減少軌道に入りました。REPREの終了、グル市道路整備計画調査団の帰国を反映したのですが、今月末にはAWATの終了も見込まれ、グルの日本人人口が一気に縮小することになります。一方で、グル市内の人の動きは、過去一年で間違いなく増えています。古い建物を壊し、建て替える俄か工事も始まるなど、市内道路の整備を見越し、投資が活発化しているのかも知れません。そんな中、私の隣人に、な、なんと南スーダンからの難民？家族が加わりました。こんな時勢を映し出すグルの人の動きです。

<編集後記>

ACAPの計画策定能力強化専門家として活躍された中嶋さんが帰国されて早2週間が過ぎました。そんな日曜日の夕方、街の中でアガゴ県のコミュニティ開発担当者に声を掛けられました。「中嶋さんがいなくなって寂しいね」と話を向けたら、「JICAは、彼の任期も延ばず、何てことをしてくれたんだ」と叱られてしまいました。「彼は、次の仕事でプロモーションするんだよ」と説明したら、やっと、笑顔になって、「それなら仕方がないけど」だって。専門家が現場に腰を据えて活動することの意義を強く感じるとともに、これ程までにカウンターパートから信頼された中嶋さんを羨ましくも思いました。次の勤務先でのご活躍をお祈りしています。

グルフィールドオフィス 高橋嘉行・佐藤由理